

第二話「烏丸」

窓から見下ろす貴樂の街は今日も明るく、眠りにつく気配を感じさせない。烏丸タワーを中心として羅摩の壁までをほぼ完璧な円環にして貴樂は構成される。烏丸タワーで働く権利を得たごくわずかな者、そこに住む権利を与えられた更にごくわずかな者たちは、自分が自分たちこそが世界の中心に生きていると錯覚する。

野都はどうだろう。貴樂に住む者にとって貴樂が世界の中心であれば、野都に住む者にとっては野都が世界の中心で、貴樂は世界の外れだろうか。どこであろうと、そこに街があつて生活する人々がいる限り、そこが世界の中心であり、この惑星のいたるところに世界の中心があつて、その全てに優劣など存在しないのではないのか。

漆海は窓から遠く離れた野都を見つめ、幼い頃、野都に視察に行つた時のことを思い返していた。

漆海の父、冴七は伝統と血筋を重んじる惑星スクナビコナ星選中央議会の中では異色の存在で、一代でこの地位に登りつめた。一代

のだ」

漆海には強さと弱さ、戦うことと守ること、その違いがわからなかったが、父に口答えしてはいけない雰囲気だけは察した。二人を乗せた華供屋(カグヤ。ダーマの高血統、白銀ダーマの馬車)が野都の街をゆつくりと進み、野都の中心街に入つた。中心街に入ると人々も増え、賑やかになってゆく。街は聞いたことのない音楽や、見たことのない服を着た人々で溢れ、簡素な屋台が立ち並び、そこでは自由で物を売つたり、食べたりしている。商人は忙しそうに汗を流し、僅かばかりのお金を手にする。そこで買い物をしたり、酒を飲んでい

る物たちは一様に楽しそうに商人と話したり、恋人と手をつないだりしている。

貴樂から出たことのない幼き日の漆海にとってその光景は驚きの連続であつた。ここには人々の生活が見える。貴樂の中は綺麗に整備され、常に清潔で何不自由なく暮らせる。しかし、そこに人々の生活を感じることは少ない。全てが管理され、安全で、空腹を感じることのない貴樂なのに、なにかが満たされない。その満たされない気持ちはなんなのか。漆海はいつも考えていた。ここで見る人々の笑顔や、活気ある音楽や、輝く汗や、声や、つないだ手。

生活の匂い…。それこそが漆海の求めていたモノであつた。貴樂にあつて野都にないもの、そんなモノは数知れない。しかし、野都にあつて貴樂にないモノもある。それと同じで、もしかしたら弱者だけが持

てここまでの権力を得たのには裏があるはずだが、漆海にそれを話したことはない。そもそも極端に父との思い出が少なく、家族で旅行に行くのはもちろん、同じテーブルで夕食をとつた記憶も数えるほどしかない。その少ない記憶の中に、野都の視察があつた。父は常に強かつた。力を持つていた。その力を息子に見せつけるのかのごとく、父は誰に対しても厳しく、冷酷であつた。

「漆海、お前もいずれは烏丸財閥を継ぐ人間だ。烏丸の名を語るには常に強くなければいけない。強さを知るといふことは弱さを知ることでもある」

冴七は野都の人々を蔑むような目で見つめ、漆海に語りかけた。「父上、ここにいる人間は弱い者たちなのですか？見た目は私たちとなんら変わりはありません。それにここにいる人たちは、確かに綺麗な身なりはしていませんが、肉体的には私たちよりずっと鍛え上げられているように見えます。それに…」

冴七は漆海の話を通り、ゆつくりと、重厚感のある声で話した。「漆海、いいか、よく覚えておきなさい。強さも弱さも本質は同じことだ。何かに怯え、恐怖することだ。その対象に立ち向かう心を持つているか、それとも逃げるのか。それが強さと弱さの違いだ。ここにいる人間たちは常に何かに怯え、逃げてきた。だから体を鍛えたり、汗を流して働くことで、その何かからまた逃げたり、守ろうとしているだけだ。立ち向かつて行く心を持つていない。それを弱者と呼ぶ

時。

ち、強者が持たないモノもあるのでは。そんな事を考えていたその

「コラー、待てワルガキ！食い逃げだ、捕まえてくれ！」

近くの屋台から怒号が聞こえ、一人の子供が逃げた。まだら、6歳くらいであろうか、漆海よりもさらに幼く見える。よく見ると、背中に赤ん坊を背負つて必死に逃げていた。その子供は、大人たちの足を器用にすり抜け走つていたが、漆海たちの警備にあつてた神駈に運悪く捕まつてしまった。

「離して！お願い、この子にも食べさせてあげないといけないんだ！昨日から何も食べてないんだよ！」

その子供は目に涙を浮かべながら神駈に訴えた。「ダメだ。いくら子供とはいえ、罪を見逃すわけにはいかない」

神駈は冴七の方を二瞬見たが、冴七は神駈と視線を合わせる事はしなかつた。

「父上…」

漆海は父になにか言おうとしたが、漆海にも視線を合わせようとしなない。やがて屋台の店主が現れ、神駈が子供を捕まえた事に驚きつつ頭を下げた。

「すいやせん、お手数おかけしやつて。へっ、まさか貴樂のお偉いさんがこんなところにいらしてるとは思いもよらず。失礼いたしました」

そう言つて子供の首元を乱暴に掴み、屋台の方へ去つて行くとした時。

「て、店長！また食い逃げ！捕まえて！そのピンクのガキ！」

「なにー！とつ捕まえてやる！」

漆海は大人たちの足元を流れるように走り抜けるピンクの髪を見た。そのピンクの少年はなぜかこちらに向かつて走ってくる。早い、さつきの子供とは比べものにならないくらい俊足。しかし、このまま真つ直ぐこちらに逃げてくれば神駟に捕まってしまう。漆海は複雑な気持ちでピンクの少年と父を交互に見つめた。この子供たちを助けて欲しい、お腹を空かせた、まだ自分と同じ小さな子供ではないか。しかし声に出す事は出来なかった。

「このガキが」

神駟がこちらに向かつて走ってくるピンクの少年を捕まえようと身構えた。どう乗り越える…。しかし、そのピンクの少年は神駟と屋台の店主の目の前でピタリと止まった。急に止まった事に神駟と店主があつげにとられていると、ピンクの少年は

「おつちゃん、アンタ店主だろ。客にこんなもん出しちゃいけないでしょ、ほら」

と、屋台で売っている団子を差し出した。一口齧られた団子には、髪の毛が2、3本挟まっていた。

「こんな食べたら吐きたくもなるよお、おつちゃんの髪の毛入り団

色々取り締まってくれよなあ。野都もそうだけど、貴樂にも強いだけで中身の無いやついっぱいいるんでしょ、よろしく〜」

漆海はピンクの少年にあつげにとられながらも、強いだけで中身の無いという言葉の意味を考えていた。父の顔を見たが、相変わらずこちらに視線を投げかける事はない。

「出せ」

冴七がそう言うと、二人を乗せた華供屋は貴樂に向かつて走り出した。途中、川でピンクの少年と、捕まった子供が楽しそうに話しているのが見えた。二人の様子からするとおそらくあの二人は初対面であろう。ピンクの髪の少年は、あの子供たちを守るためにウソをでつち上げた。その行為が正しいかどうかはわからないが、あきらかに自分よりも大きく、力を持った相手に対し、誰かを守るために立ち向かつてゆく力のことを愚かと言うのか、もしかしたらそれも強さと言うのかもしれない。

「入れ」

そう言うと漆海の部屋に壱輝と響式が入ってきた。

…まじか。白服かよ…。壱輝の背中に冷や汗が流れた。貴樂特別神駟白衛隊は貴樂の中でも特に優れた頭脳と身体能力を持つ神駟の中でもエリート部隊であり、主に要人のボディガードを担当している。真つ白なマントを着用し、通称白服(シロフク)と呼ばれる。漆

子なんて気持ち悪いじゃん。あれ、おつちゃんほとんどないじゃん。じゃああの店員の髪かね、へっ」

店主は神駟の手前、怒りを抑えるのに必死だった。

「おつちゃんが今捕まえた子、食べた途端に髪の毛に気づいて気持ち悪くて吐きそうなんだよ。ほら、そこに川があるだろ、まずはおつちゃんの髪の毛団子、じゃなかった、あの店員さんの髪の毛団子吐かせてやつてよ。俺のツレなんだ。髪の毛入りとはいえ、食べちゃったからお金はちゃんと払うからさ。ほら、これでいいでしょ？」

少年は店主に小銭を渡した。

「こらガキ、いいがかりは止せ。この髪よく見りゃピンクじゃねえか、こんな髪の毛の色が店員がうちに…」

「それに」

少年は店主の話をして続けた。

「それにこの店さあ、営業許可証がどこにも…」

「あー、待って待って。わかつたからよ、さつきと行け！もう二度とうちの店来るんじゃねえぞ！」

店主は捕まえた子供を解放し、その子供はピンクの少年をチラッと見て川の方へ走った。神駟の手前、営業許可証のことで大それたなくないのだ。店主は慌てて店を片付け始め、ピンクの少年は冴七と漆海の方を向いて話し始めた。

「貴樂のお偉いさんさあ、弱い者いじめばつかしてないでちゃんと

海の警護に白服が付いていても不思議ではないが、やはり通常の神駟とは威圧感が違う。

「クククク…。刀実様、お待ちしておりました。こちらへどうぞ、念のためですがボディチェックさせて頂きますよ。クククク…」

そう言うと白服は二人の体を触り、武器がないかを確認し始めた。

「うひー、すんげえな舌にい、やつば貴樂のお坊つちやまはこんな所に住んでんのかあ。まるでマンガにでてる…」

「黙つてろ響式！漆海様、大変失礼致しました。なにせ貴樂に入るのが初めてのまだ子供でして、失礼をお赦しくくださ〜」

「待てよ舌にい、俺もう子供なんかじゃ…」

壱輝は響式の口を塞ぎ、深々と頭を下げた。響式も壱輝に頭を押さえつけられながら、嫌々頭を下げた。白服が響式をつまみ出そうとするのを漆海が制し、

「まあよい。随分やまかしい。ペットを飼い始めたのだな、仕立屋。しかも言葉を喋るのかその生き物は。なんていう動物だ？」

「……！」

壱輝は響式の口を塞いだまま答えた。

「本日は明日のお召し物をお持ちになっただけですので、ご試着が終わり次第、早々に引き上げさせて頂きます。ほら響式、早く漆海様のお着替えを手伝え」

響式が漆海に近づこうとすると白服が前に出て

「クククク…。刀実様、いくら野都の賃金がお安いからといって、ペットにお着替えを手伝わせる事はよろしくありません。ましてこんな獣臭い野生の動物を漆海様に近づける訳にはいきません。クククク…」

「大変失礼しました、今すぐ私がご用意致しますので」

そういうと壱輝は響式を宥め、なんとか落ちつかせ、着替えの準備を始めた。

壱輝の作った洋服は全て手作りで、今回の衣装は野都の外れにある養蚕場から仕入れた一番高級な絹を使用している。事前の綿密な採寸により、サイズも着心地も申し分ない。しかし、今回のような場合は絶対にミスが許されないため、ミリ単位でサイズを変えたモノを何点か用意してある。

「仕立屋、お前の作る衣装にはケチのつけようがない。完璧だ。だが、二度とペットを私の部屋へ連れ込むな。そこにあるエサはペットに与えて良いから持って行け。よし、これでいいだろう、仕立屋、ご苦労であつた」

そういうと漆海は着ていたジャケットを脱ごうとしたので、壱輝がそれを手伝う。その時、漆海は小さな紙切れを壱輝に手渡した。なんの事だかわからず、壱輝は漆海の表情を伺ったが、漆海は壱輝を一瞬見つめるだけで何も言わなかった。

漆海の試着が終わると白服は再び壱輝と響式のボディチェックを始めた。

「クククク…。野都の生活は大変でしょう？方が一、漆海様の持ち物が持ち出されてはいけませんので。とくに今回は野生動物を連れていらつしやる。念のためですよ、念のため。クククク…」

幸い、漆海が渡した紙切れが発見される事はなく、無事部屋から出る事となった。

「仕立屋、ペットのエサを忘れるな。今回も良い仕事であつた」

漆海はそういうと、袋に入つた高級そうな箱を壱輝に手渡した。

「漆海様、今回もご用命頂きまして誠にありがとうございます。明日の設立記念祭の成功をお祈りしております。それでは良い年をお迎えください」

壱輝と響式が部屋から出ようとすると、白服が響式に対し、

「クククク…。漆海様からエサを頂けるなんて幸運ですね。でも刀実様、普段残飯ばかりの動物がこんな高級なものを急に食べるとお腹壊しかねないので、充分にご注意を。クククク…」

壱輝は響式の口を塞ぎ扉を閉めた。